

保身のファシズム

盛田 常夫

企業であれ国家であれ、一度、権力の甘みを知った者は、その権力を永遠のものにしたいと考える。社会主義を標榜しようが資本主義を標榜しようが、これは権力の本性。身近な例では、2004年の総選挙に敗れたFIDESZのオルバン党首が、権力を失った後の喪失感から自暴自棄的な振る舞いを行ったことは良く知られている。

スターリンであれヒトラーであれ、チャウシェスクであれ金一族であれ、はたまた堤義明であれ新興宗教のカリスマ指導者であれ、権力の絶対化と永遠化の試みは、絶えることのない権力者の営みなのだ。

内なる天皇制

今、日本では堤義明の父、堤康次郎の墓が話題になっている。墓というより古墳、いや御陵ともいうべき代物だ。グループ企業の幹部が交代で寝泊りして、365日、御陵を清掃するという。19万坪の堤御陵に比べれば、レーニン廟や毛沢東廟など四畳半の墓に過ぎない。世俗の者が権力を誇示する常套手段が、王（天皇）のような絶対権力者として振る舞うことなのだ。

杉田かおるが自伝で書いている。「このメロンは天皇と私だけが食べられるメロンだと称して、幹部の信者にメロンの食べかけが回された」、と。権威に箔を付けるために、天皇を引き合いに出すのも、一つの常套手段だ。この程度の指導者を崇めている人々が、北朝鮮の体制を嘲笑したり批判したりすることはできない。

そういえば、今は亡き某日本大使も、食い残しの西瓜やピザを部下の館員に回していた。「食わせてやる」、と。「特命全権」大使の中には錯覚する人もいて、狭い大使館社会で零細絶対君主として振舞う性癖のある人が、少なからずいる。小人が権力を誇示しようとする、と、喜劇を通り越して悲劇になる。

いろいろ話を聞くと、オーナー会社の創業者の中には、封建絶対君主の真似をする人は多いらしい。堤家ほどのスケールではないとしても、不条理な絶対命令をやたら連発する人がいるようだ。天皇模倣は何もオーナー会社に限らない。今はもう吸収合併されてしまったが、某都市銀行の頭取の地方出張は、「行幸」そのものだったという。東京から大阪まで出張するのに、停車駅の名古屋では支店の女子行員が花束を持ってデッキで手渡す行事が必ずセットされていたという。もともと、堤義明「天皇」の行幸では、訪問先での一言一句が本部に伝達され、幹部社員に回覧されるシステムが出来上がっていたというから、宮内庁も顔負けである。

象徴天皇は実体権力を持たないが、世俗の権力者はカネとカネで雇った臣民で、権力を維持する。この種の時代錯誤の封建支配は、いろいろな組織の中に生きている。この体制には、権力者を支える「臣民」が必要だ。従わなければ命を落とす国家権力への恭順と違い、会社や組織にそこまでして尽くそうとする「組織臣民」の動機は何だろうか。服従していれば生きていけるという安心感と保身の術が、思考を停止させるのだろうか。これこそ、保身が生み出すファシズムだ。

聖権力と世俗権力

現代の民主主義は権力の分散と権力の交代を基礎にしている。特定の個人や家族が権力を独占したり、世襲したりすることを認めないのが民主主義で、これを認めるのが封建的絶対主義だ。これは社会主義とか資本主義というような経済体制の区分とは別の政治権力の区分である。たとえば、北朝鮮の体制は社会主義とか資本主義という範疇に入るものではなく、封建的な絶対主義と規定するべきだろう。社会主義や資本主義を語る以前の社会だと考えればよい。

世俗権力が権力を絶対化する方法は何か。一つは独裁制をとることであり、今一つは世俗を超える権力の衣装（王政）を纏うことである。王家（皇室）は生まれながらにした聖権力であり、世襲権力である。もちろん、聖権力も最初は世俗権力であったが、歴史を重ねることで、世俗から聖への転化が行われた。いったん聖権力が確立すると、世俗権力が聖権力を名乗ることができなくなる。しかし、聖権力が不在の社会であれば、世俗権力が独裁制を通して聖権力に転化する。帝政を打倒したはずのロシアではソ連共産党は完全独裁制を敷くことで、いつの間にかロシアの聖権力に転化した。金「王朝」もチャウシェスク「王朝」も、このように理解すればよい。新興宗教のカリスマ指導者を含め、世俗の聖化の試みが、支配の本質なのである。

西欧諸国では二つの世界大戦を通して、王室が権力支配の実体を失い、儀礼としての象徴に転化することで、聖権力から世俗権力への移行が行われた。日本の場合はやや複雑で、明治維新にいたるまで象徴的な権威しか持たなかった聖権力（天皇）を、維新革命以後の近代国家樹立のための求心的象徴として実体化しようとしたために、形式的には啓蒙君主制をとりながら、実体的には世俗的権力（財閥・軍部）が支配するという二重構造を生み出した。これが戦後処理における戦争責任の曖昧処理をもたらし、今日に至るまでアジア諸国との摩擦を惹き起こしている。天皇の戦争責任の曖昧処理は、日本の近代化そのものの性格から派生しており、その曖昧さが現代日本の外交の手を縛っている。

元首か象徴か

憲法改正の中曽根試案は、天皇の元首化を提案している。しかし、今さら天皇に統治の実体を与えようする試みが受け容れられるはずがない。名前だけの元首なら、現在と変わらない。象徴であれ、現在の日本の統治体制は立憲君主制と規定しても良いからだ。さすがに自民党も、元首では国民の反発を惹き起こすというので、中曽根案を採用しないようだが、この問題はも

っと根が深い。日本の組織に見られる「内なる天皇制」の問題を、もっと考える必要がある。日本が文明的民主主義国家になっていくために、克服すべき課題の一つのはずだ。

他方、象徴天皇制は天皇家の人権制限の上に成立していることを忘れてはならない。世俗を超える聖権力を構成する人々は、人権という市民社会の保護を受けない。これがまさに民主主義社会における聖家族の矛盾である。欧州の王室は限りなく世俗化することで、この矛盾を解決しようとしつつある。しかし、それはやがて聖権力の消滅を帰結せざるをえない。宮内庁の危惧はこの一点に尽きる。限りなく世俗化すれば、天皇制が消滅する。

女性天皇は解決策か

女性天皇の容認は、象徴天皇制が抱える矛盾を何ら解決するものではない。「朝日新聞」の論壇で安丸良夫が指摘していたように、歴史的に天皇制の継続は「側室制度」に支えられていた。「側室制度」を廃止し、市民社会の一夫一婦制度を導入した段階で、男系の継承者が消滅する危機が始まった。女性天皇の容認はこの危機を回避する策としては有効だろうが、そこまでして天皇制を維持すべきなのだろうか。

男性であれ女性であれ、能力のある者が、形だけの仕事を与え続けられたとしたらどうなるだろう。会社の窓際族と同じである。精神に異常を来すのは当然だろう。そのような悲劇を請け負う個人の犠牲の上に、民主主義社会の象徴天皇制（王室）が維持される。

いずれ日本の皇室も、欧州の王室と同様に、限りなく世俗化していくだろう。後世の歴史家は、キャリアウーマンをプリンセスとして迎えたことが、天皇制世俗化の出発点になったと記すだろう。しかし、アジア諸国の独裁体制が簡単に消滅しないように、日本の天皇制もそう簡単に廃止されることはないだろう。だが、形骸化された天皇制を22世紀の世界まで維持することにどれほどの意義があるのだろうか。

（関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい）